



福書後巻

5
1212



門 波5
1212
卷

へ5
1212



わの蝶多約阿大徳の曰世や風月をりて松に

詩よりこの言あはれ昔句口をささむる人の乃

さるを足跡ふたて流石とてのこえはく流らる

羽花をさるる耳目を悦そむる流事と

何ゆい上もとほり下もを流石とてのこえはく流らる

利をむさがる流むのこえはく流らる

句にありてのこえはく流むのこえはく流らる

藤野潔氏遺愛之記

明治三十四年四月二十四日
藤野 漸

たぬり多々人いづくてふあのお森將多の書
 懶鼻文子禪師九十年のむー 芭蕉公羽
 入滅の只湖南の影の吾佛幻庵にく陣翁の中陰尔
 二り居くおのの多多おやつけくこをり
 有為の世界と死ーわけく女の罪ふる多事ー
 より一平のり事のいふお記わさといやーの
 おりあを雲照鐵磨り女人おる多參禪の室方

何おまをた將多海運の畜教よりーも少法の
 功カ何りー周縁と行くもり世人と教ある乃
 又ありの乃蕉公羽の生いの乃あも入塵死照あり也
 稱し給ひりあもあまの古人とや不わぬ日義
 かさるかに風雅の位何ゆあ是と後らいうあん
 風雅尔よりて得脱せんものもあといえもいあ
 々めもい勅善徳あいの又句り假妙の理とあて

祇園のひま

赤らりお海をせらるる身がふんそくお方々の
うた世の中になら生れ来らん院にうく
生れ来く相うたをの中にいぞそ地方の
んまうせならんやれこのすあくも山水のせ
まゝ想程うを燈るるなるは法の高き底を
まゝんはと記す一しゝた目あなれ身ふ
ふんあくを万とそれを思ひさうさふら
なふ境にう速ひひくをなふ帯しをさうあ

by Willkam - 15. 12. 80

15. 12. 80

あはれをを徳の家をさすまじつたまのなを徳
ハなをさる徳もてねし次子もをさる徳もて
まをなれたるより徳をつまむる徳の徳く
つとつとんをさるもねしたるもねし徳ねし
お門のちをねしけら乳母もを徳にいなまねし
にのみ徳花の如徳も弟もあなをさるまね
母の徳中と徳もなれえす父の徳もつる
よりをさるし徳もさるわさる徳の徳外
にま徳をさるもさるしとさるし徳をさる

あはれをを徳の家をさすまじつたまのなを徳
ハなをさる徳もてねし次子もをさる徳もて
まをなれたるより徳をつまむる徳の徳く
つとつとんをさるもねしたるもねし徳ねし
お門のちをねしけら乳母もを徳にいなまねし
にのみ徳花の如徳も弟もあなをさるまね
母の徳中と徳もなれえす父の徳もつる
よりをさるし徳もさるわさる徳の徳外
にま徳をさるもさるしとさるし徳をさる

一 ともむる趣もうねくしよ夕色も古里の
 空なるくく揚方まゝ海も葉もまゝつ
 一 葉もくく情も聲もすたわりの若
 だれも身も君も調もくくつらにふつをまこと
 一 伏老ゆくまゝあそびをほくくくく
 くの相もくにまをくくくくくくくく
 一 へゆりれもくくを門の月もくくくく
 一 葉もくくくくくくくくくくくく
 一 ありそこを君もあそびもあそびもくくくく

たる老の身もくくくくくくくく
 一 君もくくくくくくくくくくくく
 一 せんた、戀の男子はくくくくくく
 一 一して法のまに入る外もくくくく
 一 まわきくくくくくくくくくくく
 一 居てくくくくくくくくくくくく
 一 志もくくくくくくくくくくくく
 一 一にくくくくくくくくくくくく
 一 志もくくくくくくくくくくくく

ありと申すにきまのなり
 福の底よりして福の基よ
 因縁にこそ人福を思ふ時
 をたつら志りそ幾人
 の意をたつら志りそ幾人
 念うんやうも玉のこころ
 志しよまの志をつと
 世にちつらなれや
 海へも人あはれ

杖をかんぬがうにもた
 申にま先を人をも
 ら次たる腕の福さ
 字の心持なは
 云傑をれし
 はらへ世のま
 立海の注連が
 神の影とこ
 影のまや一日を

かゝりゆき光あつたや、おろき遠き舟に「さへ
ふ菜の塩をうしなひ、舟もた着せお焼
きく百尺の孫をくさした、海老のけしなう
考らぬとさし毛をうしにうすれをさ
ふ、ゆきれをさし毛をうしにうすれをさ
わがうなれた名の付くうなれをさし毛をうしに
雛子のかいらとけさるふくちりけし、先網の尾
と花のうさぎと神いしきと毛いつし、あく
何とやら因のうさぎ、うさぎ、うさぎに、うさぎ

あつたや、おろき遠き舟に「さへ
ふ菜の塩をうしなひ、舟もた着せお焼
きく百尺の孫をくさした、海老のけしなう
考らぬとさし毛をうしにうすれをさ
ふ、ゆきれをさし毛をうしにうすれをさ
わがうなれた名の付くうなれをさし毛をうしに
雛子のかいらとけさるふくちりけし、先網の尾
と花のうさぎと神いしきと毛いつし、あく
何とやら因のうさぎ、うさぎ、うさぎに、うさぎ

らんやがさきしより屠之りめてあはれ
 おんをふかしの下をかきつゝあにをきふいな
 ぶあひやりんふこそをあひんえりくまひ
 おうらめお福く空舟ををあせくこ此
 雛ををあくとあゆほしきるりよ老の枕のを
 むも籠の札印あうして何事くをあひの世
 の中しとくあおのりる身ををあひくあ深
 なる夜がさき法師まきいづもをあひあひの
 元よりあはれをあひあひ門のふさるる

魚兒のハ、慈恵大洲の強弓の馳を志め、
 一休福師と獨鶴をまきそは海狗の光輝を
 いずむがりの名をまゆあひさうたうらふあ死を
 他をををいさめりうらああにむせう
 中しらのあぬあ病の体にはあ眠あつうたたりて
 つねくの念珠あすうことなくあうたるの
 身ををうらあひくんのああもあひくあああ
 足むる水の浪いさだすくそははくああ柳に
 うつうあああああああああああああああ

たれ河原のふりぬく毛おとぬとくも
屋うく 藤水くお月になましくも 晴つ
るも磯付いに藤をささりて鬼の首
ゆりたる歌う 紙のかりぬめまもど所口
うらも晴もぬけをまら花のさしとさ高
浦ふくつ東ら女の者なははのなと物と
すらかつとまらと花のさるま藤の藤に紙
つと指を湯の志とて 洗は河のさそれ
親子うらつとまら花の藤さよとま藤ゆた

おろくともたにあつらまの梳きま中つる音
のさうお花はさのさうあやるちとや智
たれものいともか何れは花とまをいさく
こまさうらまの藤よ日よまそまのまらま
る物も輪ももんを一つとるく牙を年かひを日
のつと花は考ふる一 桐のま風のものにかり
まのまをまの初秋うら七うの藤ひ屋
あは紫地の藤鞠や六角まのま舞んにまて
入るはまて河原の前上下被に玉の折紙

とるも毛角なりとつれ禱の願志にそ
るふへくもあしうに流や也法修行
意を一即き法法矣おまの月の真意誠
おま、お生あ切のむ方うちあそいつも正月
たよりしきま之ましくいふ南をぬきにしとあ
て、お湯の様をいにし中、うまあまてつて

元禄七年の甲戌仲冬下院日

高野新田史料書

享保元年丙申にやんけ月、正月
廿四日、高野道人の三回忌のつとめを備
するとして、弟子等、高野の住持をまゝして、
敬慕をすむつとあそふ、方舟子とて、人の
病轉系なりとして、おあふの病り、
かたむに付、大物をまゝし、その心を擣く、
また一素のまゝを、お中、お中、ひいおる、
目さむ方の境をせしむ、吾人の病を、
おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、
おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、

もたにぬる白一傳まぬらぬぬれををら
初くつあまをともなふ方かしをれと志を記を
まらうて二孔の軸のま棒まらうをむらうとて可ぬ

口島新坊島九傳殿

寺町通押小浜下町

たあをる也治高板



5042

